

地域社会学会会報

No.217 2019.11.23

地域社会学会事務局 Office of Japan Association of Regional and Community Studies
〒277-8563 柏市柏の葉 5-1-5 東京大学大学院新領域創成科学研究科
社会文化環境学専攻 清水亮研究室内
TEL 04-7136-4808(直) FAX 04-7136-4801 郵便振替 地域社会学会 00150-2-790728
E-mail jarcs.office@gmail.com URL <http://jarcs.sakura.ne.jp/>

目次

1. 2019年度第2回研究例会について
2. 研究委員会からの報告
3. 編集委員会からの報告
4. 社会学系コンソーシアムからの報告
5. 事務局からの連絡
6. 国際学会・海外調査等に関する経験の交流記
インドネシアでの調査、学会報告より 坂口奈央（東北大学大学院）
7. 「震災問題研究交流会」（2020年3月開催）の報告募集と開催のお知らせ
8. 会員の研究成果情報(2019年度・第3次分)
9. 理事会・委員会のお知らせ

2019年度 第3回研究例会のご案内

日時 2019年12月7日(土) 14時30分～17時30分 ※開始時間に注意

会場 大谷大学本部キャンパス 慶聞館 K304

*会場へのアクセスは本会報最終頁をご参照ください。

テーマ 「ローカルメディアとまちづくり」

第1報告 田中志敬(福井大学)

地方都市の多極・交差型のタウンマネジメント主体:福井市中心市街地のまちづくり

第2報告 細川善弘(福井新聞)

ローカルメディアとまちづくり:福井新聞記者の「まちづくり企画班」の試み

第3報告(クロストーク) 丸山真央(滋賀県立大学)・細川善弘・田中志敬

ローカルメディアが地域に果たす役割を問う:批判メディアと地方創生の狭間で

※研究例会には非会員の方も参加できますので、関心のある方にお声がけいただけると幸いです。

※研究例会の終了後に、懇親会を予定しています。形式張った席ではありませんので、お気軽にご参加下さい。出欠は当日うかがいます。

1. 2019 年度第 2 回研究例会報告

2019 年 10 月 12 日（土）に本年度の第 2 回研究例会が早稲田大学にて予定されておりましたが、台風 19 号が東京を直撃するというので、9 日（水）の時点で中止を決定いたしました。同日中に学会 WEB ページに中止のお知らせを掲載するとともに、学会名簿に記載されているメールアドレス宛に同じ内容のメールを送信いたしました。メールアドレスを登録されていない方、登録されているメールアドレスをすでにお使いでない方には、恐縮ながら、個別の連絡を差し上げることができませんでした。

同日予定されていた理事会、各委員会も中止となりました。この関係で 12 月 7 日の研究例会時に開催する理事会で審議が必要な事項が多数に及んでいます。したがって、理事会の時間をいつもより 30 分多く確保いたします。研究例会の開始時間も 30 分遅らせて、14 時 30 分からといたします。参加を予定されている方は、開始時間にご注意ください。

（事務局）

2. 研究委員会からの報告

第 2 回研究委員会は台風のため中止となりましたが、メール会議を行い、第 3 回目研究例会の報告者を協議しました。当初は、第 2 回研究例会報告を、第 3 回目に行う方向で調整を図りましたが、報告者の日程が合わず、今回報告予定であった中澤秀雄（中央大学）「地域経済循環と T 字型まちづくり論：東北から構想するポスト地域社会学」・船戸修一（静岡文化芸術大学）「「関係人口論」の地域社会学的考察：浜松市天竜区佐久間町の集落調査を踏まえて」は、第 4 回の研究例会で報告をお願いすることとしました。

12 月 7 日に開催される第 3 回研究例会は、田中志敬研究委員のコーディネートにより構想を温めてきた「ローカルメディアとまちづくり」をテーマに行います。第 1 報告では、田中研究委員が第 2 報告の事例となる福井市中心市街地のまちづくりの動きと、多極的に生じた担い手がプロジェクトによって交差する関係を整理します。続いて第 2 報告では、福井新聞の細川善弘記者から、参与観察やアクションリサーチ型取材とも言える、自身が担い手となって地域課題解決に向き合いながら、リアリティを深めていく「福井新聞まちづくり企画班」の取組などについての実践報告を行います。さらに第 3 報告では、丸山真央会員が細川記者の取組をメディア論に位置づけつつ、細川記者と田中研究委員および会場も交えたクロストーク方式で、ローカルメディアが地域に果たす役割を地域社会学者が地域に果たす役割と織り交ぜながら、その可能性について掘り下げていきます。

（矢部拓也）

3. 編集委員会からの報告

第 2 回編集委員会は、台風のため会議が中止となり、数日間にわたりメールにて審議を行いました。特集、共同企画報告集、書評の進行状況を確認しました。9 月末締切で 8 本の自由投稿論文があり、投稿規定を確認・審議しながら、査読担当の割り当てなどを決めました。お忙しい中、査読をお引き受け下さった会員の皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。投稿規定、自由投稿論文査読規程の検討も併せて進めております。J-stage 登録業務の外部委託について文成印刷に依頼することを承認し、理事会に報告しました。

なお、地域社会学会年報の発行をお願いしていたハーベスト社の小林達也社長が急逝されたことに伴い、32 集発注先については現在事務局と相談中です。

（松蘭祐子）

4. 社会学系コンソーシアム担当からの報告

社会学系コンソーシアムでは2019年7月20日(土)に理事会を開催して、これまでの活動報告(3月27日発信の日本社会学会理事会との共同声明「基幹統計における不正問題への対応と社会学の協力について」、3月末のNewsletter 12号の発刊など)を行ったうえで、2020年1月11日(土)に開催される日本学術会議との共催シンポジウムの企画について検討が行われました。

現段階でのシンポジウムの企画内容は、以下のとおりで、評議員会も同日開催されます。

「社会学系コンソーシアム第12回シンポジウム」

開催日時：2020年1月11日(土) 13:30~16:30

開催場所：日本学術会議講堂(予定)

タイトル：現代日本の「働く仕組み」—社会学からの接近—(仮)

概要案：

今日の日本社会では、非正規雇用や「働き方」をはじめ、雇用/就業をめぐる制度(「働く仕組み」)に起因してさまざまな社会問題が浮上しており、問題の解決が模索されている。しかし、これらの制度は単に雇用/就業の領域のみならず、生活保障や家族システムなど社会の他の領域と強く関連しつつ存立しており、そのことがこれらの制度の安定的な再生産の一因となっているようにも見える。このような現状をふまえて、本シンポジウムでは、日本社会における「働く仕組み」に社会学の視点から接近し、制度論・システム論的アプローチや国際比較の視点などを生かしつつその全体像を理解すると共に、今後それをどうデザインし、マネージしていくべきかを考えていく。

(浦野正樹)

5. 事務局からの連絡 <2019年度の会費納入のお願い>

会費を未納の方は、同封の郵便振替用紙に会員ご本人の氏名・ご住所を明記のうえ、納入くださいますようお願い申し上げます。一般会員は、6,500円(年報代含む)、院生会員は、5,000円(年報代含む)です。振り込まれた方には、年報31集を次号会報と同封にてお送りします。

また、過年度会費未納の方は、未納年度の会費もお振り込みくださいますようお願いいたします。お振込いただいた方には、当該年度の年報をお送りします。

会則第6条2に「継続して3年以上会費を滞納した会員は、原則として会員資格を失うものとする」とありますので、ご注意ください。

納入済にもかかわらず請求書が届きましたら、事務局までご一報ください。

(清水 亮)

6. 国際学会・海外調査等に関する経験の交流記

インドネシアでの調査、学会報告より

坂口奈央(東北大学大学院)

このたび、国際学会ならびに海外調査の体験記を書かせていただくにあたり、始めに自身の背景を記す。私は、2012年までマスコミで報道の取材を13年していた。東日本大震災を機に、日常生活を取り戻そうと格闘する被災当事者である住民の葛藤と対峙する中で、住民にとっての災害復興とは何かを考えさせられるようになった。とりわけ、災害遺構や防潮堤の高さを巡る議論の過程でみられた、住民の論理について分析したいと研究者としての第二の人生をリスタートさせた。

なお英会話力は、大学時代、積極的に英語を話す環境に身を置いてきたが、あれから20年以上が経過し、現在は、英語の感覚を取り戻すことに苦勞するとともに、学術的専門用語を徹底的に学ぶ必要があるなど、正直、小学校高学年~中学生レベルの英会話力である。そんな私でも、な

んとかなるということを前提に、皆さまの活動のヒントになるような情報を以下記載する。

(1) インドネシア・マカッサルで開催されたARSA（アジア農村社会学会大会）にて口頭発表（2018年8月27日～30日）

マカッサルは、インドネシアの島々の中の「K」という形をしたスラヴェシ島の中部に位置する。学会大会が行われた8月末の日中の気温は30度強と、日本の首都圏と変わらない、いやむしろインドネシアの方が少し涼しいくらいであった。ARSAの参加者は、100名前後。日本人と韓国人が30名程、他アジア各国からの参加者で構成された。

口頭発表での持ち時間は、一人20分という事前の情報であったが、司会の判断でセッションは進められた。このため、発表時間が15分の場合や、質疑応答がフロアから出ない場合、そのまま報告終了となる場合など、様々であった。今回発表した内容は、東日本大震災の被災地で、復興を目的に震災後発足した住民組織（緊急コミュニティ組織）が、災害遺構の保存を巡りどのように住民合意をけん引したのか、また、合意形成の過程で、既存の住民組織が異論を唱えた事例について、漁村という固有の地域構造から分析したものである。発表原稿はもちろんだが、質疑応答も20パターンほど準備万端で臨んだため、フィリピンの先生からの質問に、難なく回答することができた。

しかし、ARSA関連の雑誌に投稿した論文（英文・査読付き）掲載を巡り、ちょっとしたハプニングが起きた。内容は、当初掲載予定の出版社が、査読判定後に変更となり、新たな出版社による二重査読を受けたことが始まりだった。当初は、ARSA大会直後に掲載可という判定が出ていたのだが、このハプニングで半年近く、掲載を巡るやりとりを余儀なくされた。おかげで、英語力を鍛えるよい期間となるとともに、掲載にあたり尽力してくださった先生方の御対応から多くを学ばせていただく機会となった。今回の案件は、イレギュラーではあるものの、海外での投稿論文に挑戦する際は、出版社の事前リサーチが必要であると感じさせられた。（なお、掲載された論文は、Nao SAKAGUCHI 2019 “Post-disaster city reconstruction efforts and fishing villages transformation -Over tsunami disaster heritages-” Journal of Asian Rural Studies vol.3(2): pp208-220 である。）

(2) インドネシア・バンダアチェ市にて災害遺構に関する調査（2018年9月）

マカッサルでの大会報告終了後、スマトラ島沖北部に位置するバンダアチェ市へ直行し、8日間にわたり災害遺構に関する調査を行った。バンダアチェ市は、2004年のスマトラ沖地震津波で甚大な被害を受けた地域で、発災直後から行政とともに住民自ら災害遺構を積極的に保存する動きが活発化した。東日本大震災では、とりわけ行方不明者が多く、生と死を日常生活の中で如実に突きつけられる災害遺構に対して被災地では、話題にすることすらタブー視された時期もあった。被災当事者である住民にとって災害遺構とは、当該地域の中で、自らの生活と来歴という脈絡のなかで観察している。こうした観点は、アチェでも同様なのか。また、漁村という社会的文化的背景が、災害遺構に対する住民にとっての意義と関係性があるのかどうかという問題意識のもと、調査した。

調査では、知人を介して、現地コーディネーター兼通訳を雇った。アチェでは、母国語としてのインドネシア語よりもアチェ語が一般的用語である。今回依頼した方は、年に数回日本を訪れるほど日本通で、日本人独特の言葉のニュアンスなども比較的理解できたことから、ヒアリング時にストレスを感じることはなかった。ヒアリングでは、私とコーディネーターは日本語と英語で、コーディネーターとヒアリング対象者はアチェ語で行われた。また滞在中は、コーディネーターの自宅に宿泊させてもらった。コーディネーターは7人暮らしで、兄弟が日本に留学していたり、地域のリーダーをしている人もいて、アチェの事情を知るには、恵まれた環境であった。実は、この家族の一人が、私の研究対象地である岩手県大槌町を2011年に訪れていた。偶然の出会いとはいえ、御縁を痛感させられた。ヒアリングは、午前中から動き、相手次第で夜9時頃から行う日もあったが、事前にアポをとることはなく、行き当たりばったりではあったが、コーディネーターの人脈のおかげで、幅広い属性の住民20名にヒアリングをすることができた。

アチェでは、1つの村（desa）の地域社会構造として、「グチ」と呼ばれる村を行政的に運営するリーダー（選挙で選抜され、報酬を得ていて地域運営を専属的に行う）と、「トゥハプット」という長老組、そして「イمام・ムナサ」という宗教的領域によって構成されている。調査を行った desa は、LAMBUNG と LANPULO という2つの漁村である。このうち Lanpulo 地区は、津波によって運ばれてきた漁船が民家に乗り上げた状態でそのまま保存され、「津波ボートハウス」としてツーリズムマップにも掲載されるほど、災害遺構の名所として知られる。災害遺構の保存は、行政主導で行われたものの住民から異論はなく、保存整備完了後、周辺には住民が土産物店を出したり、地区内にある魚市場で水揚げ、加工したカツオ節で新たな土産を開発したりしていた。船には、この民家に避難していた住民59名が津波襲来時に船に飛び乗ったことで命拾いしたというエピソードもあり、住民は、「ここの遺構には、物語があり、交流が生まれる場所になった」と話していた。

もう1つの調査地である Lambung 地区には、発災から1か月後に、地区内に流れ着いた軍隊のボートを住民10名が避難所の前に運び、津波モニュメントとして飾られている。この船は、マップに掲載されていないが、住民は、災害復興の象徴として意義付けていた。

アチェでは、誰に話を聞いても、災害遺構のことを「津波からの贈り物、思い出、お土産」とポジティブにとらえていた。アチェは、30年にも及ぶ武力紛争が続く中、大津波で世界中の関心を集めたことで、外部者による支援が入り、紛争地として閉ざされていたアチェは、「被災地」として一気に外部世界に開放され、災害を契機に新しい社会を作るに至った。こうした社会的背景とともに、アチェの人々にとって災害遺構とは、津波遺産ツーリズムを通じて、外部者との交流から改めて住民自身が災害対応への力を強めていくこと、そして災害復興を経て「共に生きる」というシンボリック的な意味合いをもつものであった。アチェでの調査は、今後も継続的に実施する予定である。

このほか、今年6月にはスコットランドのアヴァディーン大学で開かれた、漁村と災害に関する研究交流会に参加し、修士論文のテーマであった、東日本大震災における防潮堤を巡る住民の論理について発表した。最後に余談だが、私が海外で研究発表や報告をしている期間中、偶発的であるが、海外のニュースでもトップニュース扱いとなるような自然災害が国内で発生していた。インドネシアのバンダアチェ市で調査期間中には、最大震度7の北海道胆振東部地震、スコットランド滞在中にも、山形県沖で最大震度6強の地震が発生していた。またインドネシアから帰国した2週間後には、マカッサルが位置するスラウェシ島で地震・津波が起きた。災害を機に研究者の道を選択した者としては、改めて災害に対する意識とアンテナを強くせざるを得ない。そして、国内で多発する災害を前に、被災した住民にとっての復興とは何かについて海外に発信していくことが、災害大国日本で大災害を体験した者の使命であると考えさせられた。

7. 「震災問題研究交流会」（2020年3月開催）の報告募集と開催のお知らせ

日本社会学会 防災学術連携体担当

震災問題研究ネットワーク代表 浦野正樹（早稲田大学）

震災問題研究交流会を、今年度も下記のとおり開催いたします。この交流会は、日本社会学会の研究活動委員会を中心に設けられた震災情報連絡会から発展したものです。現在は、日本社会学会理事会に防災学術連携体担当を置いておりますので、そこと震災問題研究ネットワークとの連携というかたちで開催いたします。今年度も、幅広い分野からの参加を歓迎いたします。

東日本大震災に限らず、昨今の熊本地震や西日本集中豪雨災害、台風被害、北海道地震、北大阪地震等の甚大な災害の発生を念頭において、災害と社会との関わりや影響を含めて幅広い研究交流が出来ればという思いから、第4回（一昨年度）より「震災問題研究交流会」と名称を変えて開催しております。発表者だけでなく、参加して一緒に討論していただける方、社会学者と一

緒に議論してみたい他分野の研究者、行政担当者、マスコミ関係者、災害研究に関心をお持ちの方にも参加していただきたいと思っています。

※昨年までの研究交流会プログラムなどの情報、及び一昨年度までの交流会報告書につきましては、次のリンク先からご覧いただけます。<https://greatearthquakeresearchnet.jimdo.com/>

なお、昨年度の報告書については、最終的な編集作業を進めているところで、11月末くらいに上記HPに掲載する予定です。

今年度の研究交流会は、東日本大震災のこれまでの研究の蓄積についての振り返りのほか、今後の研究のあり方や今後の研究交流のあり方について議論できたらと考えています。本交流会では研究発表を募集し、最新の研究動向を共有する時間を確保するとともに、今後の震災研究に関連する討論の時間となるべく確保するために、2日間の日程といたします。

初日（3月20日）には従来的一般報告を中心にした研究報告会とし、二日目（3月21日）は現在進めている科研費プロジェクトの公開報告会を兼ねた企画報告・検討会というかたちを取りたいと思います。

開催日時：2020年3月20日（金）～3月21日（土） 両日とも10:00～18:00

開催場所：早稲田大学戸山キャンパス（文学学術院キャンパス）

33号館3階第1会議室

*時間については、報告者の数などで若干変更があるかもしれません。

*プログラムは、決定後に、参加者にご連絡します。震災問題研究ネットワークのウェブサイト（<https://greatearthquakeresearchnet.jimdo.com/>）にも掲載する予定です。

《研究発表・報告者の募集について》

本交流会では、社会学および関連諸分野の研究発表を募集します。原則として、一般研究報告は2020年3月20日（金）となります。なお、発表時間などは、報告希望者の数により変動しますので、予めご了承ください。

昨年度、一昨年度とも25本前後の報告が行なわれました。これまでと同様、報告の概要をまとめた報告書を後日、作成したいと思っております。

《報告の申し込み方法》

(1)お名前、(2)ご所属、(2)ご連絡先（Emailアドレス）、(4)専門分野、(5)報告タイトル、(6)報告要旨（150字程度・形式自由）を、下記連絡先までEmailにてお知らせください。

報告申し込み締め切り：2020年1月31日（金）

報告申し込み先：震災問題研究交流会事務局

(office150315dcworkshop@gmail.com)

※Emailのタイトルには「震災問題研究交流会報告申込」と記入してください。

※(1)(2)について共同報告者がいる場合は、共同報告者の情報もすべて記入いただいたうえで、筆頭報告者に丸をつけてください。

※交流会にて報告を希望されず、参加のみ希望の方も、上記事務局まで事前に参加人数の連絡をいただければ幸いです。

皆様のご参加・ご報告をお待ちしております。

8. 会員の研究成果情報（2019年度・第3次分）

会員の研究成果について、2018年以降に刊行され、2019年11月15日までに情報提供をいただいたものを掲載します（過去の会報に掲載されたものや口頭発表は除きます）。

引き続き、2018年以降の研究成果に関する情報を募集しています。同封の用紙（地域社会学会WEBサイトからMSワード版がダウンロードできます）の情報を、事務局宛のメール（あるいはファックス）でお送りください。ご協力よろしく申し上げます。

万一、情報を提供したのに掲載されていないなどの手違いがございましたら、事務局まで御一報くださいますようお願いいたします。

2018年〔雑誌論文〕

- 松宮朝「健康長寿社会における農の活動の意義」『グリーン・エージ』45(2)、2018年2月
松宮朝「地域コミュニティと排除をめぐる調査方法論」『人間発達学研究』9、2018年3月
宮内洋・松宮朝・新藤慶・石岡丈昇・打越正行「貧困調査のクリティーク(3)」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』131、2018年6月
松宮朝「外国籍住民と公営住宅(上)」『社会福祉研究』20、2018年7月
松宮朝「市民農園の展開可能性：農園利用者の利用状況・ニーズ調査から」『都市農地とまちづくり』73、2018年10月

2019年〔著作〕

- 細谷昂『小作農民の歴史社会学—「太一日記」に見る暮らしと時代—』、御茶の水書房、2019年9月

2019年〔分担執筆〕

- 松宮朝「リーマンショック後の南米系住民の動向と第二世代をめぐる状況」、是川夕編著『移民・ディアスポラ研究』、明石書店、2019年6月

2019年〔その他〕

- 橋本和孝「三浦襄ノート—高見順のバリ島訪問を中心に—」、『関東学院大学人文学会紀要』第140号、2019年7月

9. 理事会・委員会のお知らせ

会場は、いずれも、大谷大学 本部キャンパス慶聞館（K316からK319まで）を使用する予定です。教室は変更される場合もあるので、当日の掲示にご注意ください。

第3回研究委員会

日時：12月7日（土）11:00～12:30 場所：慶聞館 K316

第3回編集委員会

日時：12月7日（土）11:00～12:30 場所：慶聞館 K317

第2回国際交流委員会

日時：12月7日（土）12:00～12:30 場所：慶聞館 K318

第2回地域社会学会賞選考委員会

日時：12月7日（土）11:00～17:00 場所：慶聞館 K319

第3回理事会

日時：12月7日（土）12:30～14:30 場所：慶聞館 K318

第3回研究例会 会場案内

大谷大学本部キャンパス 慶聞館（きょうもんかん）K304

〒603-8143 京都市北区小山上総町

京都市営地下鉄烏丸線 国際会館行「北大路」駅下車、南改札口から6番出口。

6番出口を左手に出てすぐに大谷大学北門があります。

北門からみて右手に見えるガラス張りの建物が慶聞館です。

<http://www.otani.ac.jp/nab3mq0000012j21.html>

